

# わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第178号

イザヤ 65:1

平成22年7月30日

ヨセフは実を結ぶ若枝、泉のほとりの実を結ぶ若枝、その枝は垣を越える。弓を射る者は彼を激しく攻め、彼を射て、悩ました。しかし、彼の弓はたるむことなく、彼の腕はすばやい。これはヤコブの全能者の手により、それはイスラエルの岩なる牧者による。あなたを助けようとするあなたの父の神により、また、あなたを祝福しようとする全能者によって。その祝福は上よりの天の祝福、下に横たわる大いなる水の祝福、乳房と胎の祝福。あなたの父の祝福は、私の親たちの祝福にまさり、永遠の丘のきわみにまで及ぶ。これらがヨセフのかしらの上にあり、その兄弟たちから選び出された者の頭上にあるように。 創世記 49:22-26、下線付加

アシェルについて……アシェルは子らの中で、最も祝福されている。その兄弟たちに愛され、その足を、油の中に浸すようになれ。あなたのかんぬきが、鉄と青銅であり、あなたの力が、あなたの生きるかぎり続くように。 申命記 33:24、下線付加

今年の七月二十日はユダヤ暦の“ティシャブ・アヴ”「アヴ（第五）の月の九日」で、エルサレムでは、十九日の夕方（日没）からすべての公共機関が停止、レストランは閉業し、イスラエルでは、恒例の沈思のときが守られました。この日は、ユダヤ人がイスラエル史における大惨事の数々を思い起こし、断食する日とされています。モーセに与えられた「主の例祭」の掟によれば、神がイスラエルの民に断食を命じられたのは「ティシュリ（第七）の月の十日」の“ヨム・キプル”ですが、いつしかこの「アヴの月の九日」も断食が習わしとなったようです。預言者ゼカリヤの時代には、タムズ（第四）の月の十七日にも断食することが習わしとなっており、この日からアヴの月の九日までの三週間、ユダヤ人は喪に服するのです。『ミシュナー』のタ・アニド4:6には、イスラエル史でこの日に起こった五つの不幸として、カナン之地に入植できなかった不信仰の世代のこと、エルサレム第一神殿と第二神殿の崩壊、「バー・コクバの反乱」、スペインからのユダヤ人追放が、記されています。

まず、ユダヤ人の伝統では、モーセ率いるイスラエルの民が、隷属下に置かれていたエジプトから神の大きな奇蹟によって解放された「出エジプト」の出来事を体験した後、不信仰で反逆の民に対し、神が約束の地に入れないことを告げられた日が、この“ティシャブ・アヴ”であったとされています。当時の不信仰な世代はこの後四十年間荒野をさまよった末、信仰を全うした二人と若い世代を除き、すべて死に絶え、結局は約束の地カナン（今日のパレスチナ）に入れませんでした。この悲惨な出来事以降、イスラエル史ではこの同じ日に、何度も悲劇が起こったのでした。586BCEには、バビロンのネブカデネザルによりソロモンの建てたエルサレム第一神殿が破壊され、イスラエルの民はバビロン捕囚に連れ去られ、エルサレムはその後七十年間捨て置かれ、廃墟となりました。この恐るべき神の裁きを警告した預言者エレミヤはエルサレムでこの模様を実際に目撃し、エレミヤ書に詳細を記しています。70CEには、ローマ人によりエルサレム第二神殿が崩壊、キリストが語られた通りに細部にわたって、預言は成就しました。ルカはルカの福音書の19章でキリストの警告を詳細に記しています。135CEには、「バー・コクバの反乱」が起りましたが、ユダヤ人の最後の要塞ベタルがローマ人によって陥落させられたことによって、十万人以上のユダヤ人が殺害、鎮圧されました。136CEには、ローマ皇帝ハドリアヌスがエルサレム神殿跡地にジュピターの神殿を築き、エルサレムを異教徒の町として再建、ユダヤ人と嗣業の地、聖地との関係を疎遠にするために「カナン」の地を「パレスチナ」と改名したのですが、このとき神殿跡地は再建工事のために乱暴に掘り起こされ、破壊されたのでした。ローマ教皇ウルバヌス二世が、キリスト教の聖地エルサレムを奪還するという大義名分で、十字軍を宣言したのは1096年でした。また、1290年7月25日には、英国からユダヤ人追放、1492年7月31日（同年3月31日布告で、8月11日を追放最終日としている暦もある）には、スペインから全ユダヤ人追放。1914年8月1日には、ドイツがロシアに宣戦布告で、大一次世界大戦開戦。1942年7月23日には、ポーランドのワルシャワの東のトレブリンカ（アウシュヴィッツ）の絶滅収容所が開かれ、ワルシャワ、ゲットーのユダヤ人が集団移送されました。アウシュヴィッツには二百人収容の十のガス室が設置され、最初はジクロン-Bガス使用ではなく、二酸化炭素で殺害させられた後、ユダヤ人たちは小さくぼ地で焼却されたのでした。これらユダヤ人に関わる恐ろしい出来事はみな同じ日、“ティシャブ・アヴ”「アヴの月の九日」（グレゴリオ暦に換算すると、アヴの月は、七、八、九月のいずれかに相当）に起こったのです。

ユダヤ年で5771年に当たる来年2011年の“ティシャブ・アヴ”は8月8日、5772年は7月27日、5773年は7月15日で、聖書の預言とユダヤ暦との密接な関係を信じている者たちは毎年、この日や「主の例祭」の日々に起こる可能性が予測できる出来事や自然現象にいつも目を留めています。“ティシャブ・アヴ”はエルサレム神殿崩

壊という大惨事に因む記念日で、一週間以上前から、肉食の禁止、安息日を除いてぶどう酒、飲酒の禁止、結婚式、宴会、余興の禁止などユダヤ人は身を戒め、シナゴグでは「哀歌」が朗読されますが、この日は、イスラエルの栄光ある未来に関連づけられる日でもあるのです。ゼカリヤ書の預言「**第四の月の断食、第五の月の断食、第七の月の断食、第十の月の断食は、ユダの家にとっては、楽しみとなり、喜びとなり、嬉しい例祭となる。だから、真実と平和を愛せよ……多くの国々の民、強い国々がエルサレムで万軍の主を尋ね求め、主の恵みを請うために来よう……その日には、外国語を話すあらゆる民のうちの十人が……私たちもあなたがたといっしょに行きたい……と言う**」(8:19-23)は、ユダヤ人たちに断食の日が喜びの日に変えられる日の到来、メシヤの時代への期待を与え続けています。キリストも愛弟子ヨハネも使徒パウロもエルサレム神殿再建の可能性を語っていますが、ユダヤ人たちは、それが近い将来“**ティヤブ・アヴ**”に起こるのではないかと、信じているのです。七月十八日現在のイスラエルナショナルニュースによると、この七月の世論調査では、イスラエル人の49%が神殿再建を望んでおり、望まない人は23%。再建の可能性を信じている人は42%、信じていない人は39%。再建のためにイスラエル国家が何らかの行動をとるべきだと考えている人は27%に対し、何もしなくてもよいと思っている人は48%。しかし、現在イスラエルが直面している政治的情勢を考慮すると、世論調査の結果にもかかわらず、神殿建設は難航のようです。イスラエルは法的には1967年の六日戦争以来神殿の山を支配していますが、そこにはイスラム教のモスク、アル・アクサと岩のドームが立っており、実質的には、イスラム教議会の管理下にあるのです。神殿の山への自由な立ち入りはイスラエルの法律では守られているはずなのですが、イスラエル政府は、イスラム教徒の暴動を避けるため、イスラム教の祈りがさげられる以外はすべて禁じています。イスラエル政府はそのように神殿の山での祈りの禁止を課し、イスラム教議会に管理の権限を委ねてはいますが、イスラエル国会内では、神殿の山の正統的な権利はイスラム教徒にではなく自分たちユダヤ人にあるという信念が揺るぐことはないのです。エルサレムはアラビア語では四通りの表現がありますが、そのいずれもイスラム教の経典コーランに登場しないことから明らかなように、イスラエルとイスラム教徒たちの間のエルサレムに対する主張は領土問題ではなく、神学的、宗教的問題なのです。イスラエル政府がイスラム教徒に対して大変な配慮をして主張を控えている一方で、人々が神殿の山に自由に押しかけるのをすべてのユダヤ人が望んでいるわけではありません。古代神殿の至聖所が実際どこにあったのかを正確にはだれも知らないのですが、信仰深いユダヤ人は参拝者や訪問客や見物人がうっかり聖なる場所を踏み荒らしてしまうことを非常に恐れているのです。モーセの掟では、ユダヤ人が神殿で自由な礼拝をするには、まず、赤い雌牛の灰を混ぜた聖めの水で身体を聖めなくてはならないのです。昨今のパレスチナを分割統治する案で一番問題となるのは、ユダヤ教徒にとって最も神聖な場所である東エルサレムと神殿の山の所有権をどちらが握るかということですが、イスラム教徒が彼らの最大の聖地メッカのカーバの支配権を平和のために譲渡すべきであるとはだれも思わないように、聖書が明白に証しし、歴史が証しているユダヤ人たちの主張が決して理不尽ではないことをこの世は知っているはずなのです。

この世が聖書の主張に反対する動きを強めている半面で、もっとも聖書はそのことを預言しているのですが、ユダヤ人の動きと神のユダヤ人に対する祝福の新たな成就において、神のご計画の新しい局面へと着実に向かっていることは明らかです。最新情報では、米国カリフォルニア州から六十二名のユダヤ人がロスアンジェルス空港から初めての“アリヤー”直行便でイスラエルに帰還しました。ユダヤ人の本国帰還の最後は米国からといわれているだけに、西欧諸国からの最多移住の記録が見込まれている今年、今後の動きが注目されます。また、冒頭に挙げた二つの預言のように、選びの民イスラエルに神が授けられた地の祝福は聖書の至る所に記されていますが、臨終の床でイスラエルの族長ヤコブが、子ら、子孫に向けて語った祝福と、モーセがイスラエルの諸部族に向けて語った祝福の中で、天然ガス、石油はじめ、地中の豊富な資源について言及されています。昨今の「イスラエルの沖合、地中海に石油発見」のニュース、昨年一月に天然ガスが発見され、昨年末、ロシュ ハ・アインの町の地下に巨大な油田があることが確証、は奇しくもそのことを裏づけるもので、非常に興味深いものがあります。ヤコブの預言の中で用いられているヘブル語“**תחת** (タハト)”は「地中深くに横たわる」の意で、NIVでは「**地中深くに横たわる祝福**」と訳されており、明らかに地中の天然資源への言及です。しかも発見された石油の埋蔵地は、まさにアシェル部族に分与された地(レバノンとの国境)の沖合で、聖書の預言の正確さ、信憑性をだれも否定できないものになっています。1970年代のイスラエルの首相ゴルダ・メア女史は、中東でイスラエルの地にだけ石油がないと冗談交じりによく言っていたそうですが、今回の発見で、イスラエルの経済的独立、繁栄を危惧する動きが近隣のアラブ諸国の間で起こっています。イスラエル国家の存在さえ認めず、聖地はじめイスラエルの地さえイスラエルの所有とみなさないアラブ諸国がその地に属する天然資源をイスラエルのものとみなすはずがなく、レバノン、ヒズボラがすでにその動きを見せているように、この埋蔵海域、天然ガス、石油所有権をめぐる新たな論争、紛争が起こることがうわさされています。なるほど、この石油発見後にパレスチナとの間に平和協定が結ばれれば、先月号で考察したゴグ・マゴグの侵略への格好の状況設定となりそうです。